



2016.11.14

45

人間は何のために 生きるのか

ハンセン病問題から聞き続けていく

ハンセン病療養所を訪問した時、入所者の方々がらたびたび言われることは、「私たちのことを、より多くの人々に伝えて欲しい」「この様な過ちを二度と繰り返して欲しくない」ということです。本誌では、そのような願いを様々な言葉として受けとめながら発信し、そしてその「過ち」とは何であったのか学んでまいりました。その過ちの根底にあったのは、私たちが同じ人間を「国の恥」と見てしまい、排除してしまうということでした。またハンセン病問題から問われたことは、世界では多様な人々が生活し、現在の社会に至る歴史や環境の中で様々な問



2016年10月14日、詰めかけた報道陣の前に初公判に臨む思いを語る原告ら（熊本地裁前）

題を抱えています。これらの状況をひとくくりにして見てしまっていないか、自分には関係のないこととしてしまっていないか、ということ。その様な世界の中で、一人ひとりが「念仏」の教えに生きるとはどういうことなのか、本誌ではあらためてハンセン病問題を通して学び、様々な声を発信いたします。職場や家庭で、また、お寺でご門徒と語り合える場の一助になることを願っています。

去る10月14日、熊本地裁でハンセン病「家族訴訟」がはじまりました。ハンセン病問題に苦しんだ家族が法廷という場で、辛く悲しい時間と家族の絆を取り戻そうと声を上げています。それは私たちの人間に対する眼差しや、人間として大切なこと、同じ様な過ちを今の社会の中で繰り返していかないと問いかける声として聞こえます。人間は何のために生きるのか、その問いに終わりが無い様に、今後もハンセン病問題から発せられる一人ひとりの声を聞き続けていきたいと思っています。

New!

座談の視点

『願いから動きへ ネットワークニュース』では、この号から同朋の会などでの座談で活用いただけるよう、「座談の視点」のコーナーを設けます。

信心の課題としてのハンセン病問題

「らい予防法」の廃止から20年、そしてその法律の非道性を厳しく問うた「らい予防法違憲国家賠償請求訴訟」勝訴判決から15年の月日が流れました。

その間私たち大谷派は「ハンセン病に関わる謝罪声明」の表明、国への「らい予防法廃止にかかる要望書」の提出、「ハンセン病問題に関する懇談会（「ハンセン懇」）の立ち上げ、10回にわたるハンセン病回復者の方たちとの交流集会の開催などを行ってまいりました。それは、絶対隔離政策によって断絶された人と人とのつながりの回復を求めている方々を根こそぎ問うてくる衝撃がありました。

大谷派は、問題の根幹に目を向けることなく、国の絶対隔離政策に宗教的な意味づけをし、入所者に隔離を受け入れさせてきました。そのような歴史をもつ教団として、私たちには「この身今（みこんしやう）」における「救済」をともどもに学ぶ大きな責務があるのです。

この欄が、「人権・平等」「非戦・平和」「環境問題」などを問うことと「本願」を課題とすることに違いがあるのか、「浄土を願う」ことと現代社会に真向かうことは結びつかないのか、など、話し合いのきっかけになればと思います。本誌では、今回から2回にわたって「ハンセン病問題」とともに考える「宗教が果たした役割とは」を連載します。隔離政策において宗教が果たしてきた役割はどういうものであったのか、大谷派の歩みを通してたずねます。また、今年の春にハンセン病回復者の家族の方たちが提訴した「家族訴訟」についても、原告のおひとりに執筆いただきました。

真宗大谷派が、なぜハンセン病問題をはじめとする社会の課題を信心の課題として受け止め、取り組むのでしょうか。ネットワークニュースでは、皆さんとともに考えていきたいと思っています。

ハンセン病問題をともに考える

宗教が果たした役割とは

ハンセン病隔離政策と 大谷派教団

日本のハンセン病隔離政策において、宗教が果たした役割はどういうものであったのか、私たちの宗門が歩んできた歴史を、読者の皆さんとともに学んでいきたいと思っています。

ハンセン病隔離政策における大谷派教団の活動の実際と、その根底に流れる「宗教的救癩意識」による教化の質について、今回と次回の二度に分けて概観していきたいと思っています。

まず、隔離政策の中での大谷派教団の活動ですが、大きく二つの事柄に分けることができると思います。一つは、言うまでもなく、ハンセン病療養所における「慰安教化」活動、そしてもう一つが隔離政策に協力する「世論喚起」活動です。

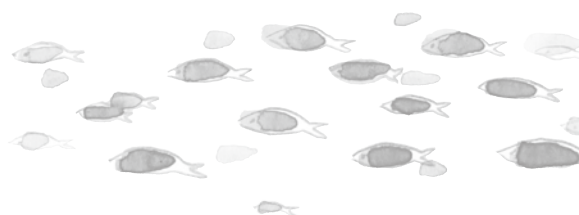
まず「慰安教化」について見ていきたいと思っています。

国立の癩病患者収容所は此程東京府下に新設せられたる事なるが、世に最も憐れむべき境遇に在る此等の患者に対し、如来の慈光に浴せしめ、慰安を与ふるの必要を認め、当局者より本山へ交渉ありしかば東京養育院蓮岡教師は、献身進んでこれが担当する事となりた

り、彼の天平の頃、光明皇后の垂救の慈懷の事など偲ばれて尊し。
〔宗報〕1910年2月号

これは、宗派の機関誌『宗報』に掲載された「癩病院患者の慰安」と題する一文です。短い記事の中に、国策に呼応して大谷派の活動が始まったこと、「救癩」という意識に直結する世に最も憐れむべきものというハンセン病患者へのまなざし、活動の中身を表す「慰安を与ふるの必要」という言葉、さらには皇恩の強調というように、その後長く続く大谷派におけるハンセン病療養所との関わりの性格が端的に表れています。

その「慰安教化」活動も、国による隔離政策の変遷と密接に関連しながら、変化を見せていきます。「癩予防二関スル件」（1907年制定）の時代、精力的にハンセン病療養所と関わりをもつのが、先の記事に登場する蓮岡法麟氏のあとをついで、全生病院教誨を担った本多慧孝氏です





癩絶滅小ポスター



『真宗』368号 1932(昭和7)年6月

大谷派機関誌『真宗』に折り込まれた大谷派光明会のポスター。
裏面には、「癩絶滅小ポスター掲用御依頼」とあり、ハンセン病差別と国策、そして大谷派教団と国策との関係が顕著にあらわれている。

が、「徹頭徹尾、絶対の信仰に依って安住せしめねばならぬ。(略) 仮令、穢身は一廓に檻禁されて居ても、霊は光明ある宇宙の法界涯に逍遙して法喜悦予窮り」という言葉を残しています。隔離の苦しみの中で、安らぎをどう得るのかということ、どこまでも宗教的境地の獲得に求めていることがわかります。

もちろんこのことは、隔離の受容という問題、宗教的救済とはいかなるものなのかという大きな課題をはらむのですが、「癩予防法」(1931年制定)の時代になると、大谷派の活動も、それまでは数人の特別な人にゆだねられていたものが、大谷智子裏方を総裁とする真宗大谷派光明会が結成され、組織的活動となっていくます。それにともない、慰安の中身として、これまでの「宗教的救済」ということの中に、国家や社会の犠牲になることの価値が加味され、強調されていきます。「癩絶滅のため皇国のため、人類の幸福のため、雄々しくもたゞひとり療養所の門をた、たけば、(略) 血統は永遠に清められ、九族は一層にさかえるのである」(『癩絶滅と大谷派光明会』)という武内了温氏の言葉は、そのことを如実に表しています。一口で「慰安教化」「国策への協力」といっても、国策の展開により、「慰安教化」の中身も変遷してくるということに、戦後の「らい予防法」(「癩予防法」を1953年に改定)の時代のそれも含め、注目していかなければならないと感じています。

次に、隔離政策推進のための「世論喚起」ですが、これは別の言葉で言うなら、「無らい県運動」への協力です。その推進役を担ったのも、さきの大谷派光明会でした。

光明会は、会則において「真宗ノ精神ニ依リ癩絶滅ヲ促進スル」ことをうたい、そのために「一般的啓蒙並同情ノ喚起」「患者及家族ノ慰安教化並救護医療紹介」「絶対隔離政策ノ促進」などを行うことを定めています。世論喚起の具体的活動としては、「同情金」の募集、啓発記事の『真宗』誌掲載、リーフレットの作成、「癩絶滅小ポスター」の派内全寺院への掲示要請など、活発な動きをおこなっています。「隔離推進」と「同情慰安」という光明会の理念を掲げた「同情金」の募集では、寄付者の名前と金額が毎月『真宗』誌上に公表され、募集期間と定められたわずか3か月の間に、全国の二千ヶ寺近い大谷派寺院が呼びかけに応じています。また東本願寺近隣にも寄付を呼びかけたよう、門前の商店や、大丸、高島屋といった百貨店などからも寄付が寄せられています。これらの活動も、世論喚起に大きな役割を果たしたと考えてよいのではないのでしょうか。

最後に余話をひとつ。大谷派光明会も、国策との連動のなかで発足したのですが、発足に向けての準備中に、当時の安達謙蔵内務大臣が訪れ「第一案としては癩療養所を設けてほしいといふこと、第二案としては本派五百万という信徒に対し患者が社会衛生の為に自ら進んで入院する心意を起させるやうに布教等の場合に宣伝してもらひたい」ことを要請したと『中外日報』が伝えています。国が宗教団体に求めたものはなんであったのか、それにどう大谷派は応えようとしたのか、次回で少しく述べてみたいと思います。

「ハンセン懇」真相究明、ふるさと・家族部会 訓覇浩 (つづく)

療養所のいよ

駿河療養所



富士山を望む春の駿河療養所

頂上から裾野まで何一つ遮るものがない雄大な富士山を眼前にする駿河療養所。1945年に最後となる国立ハンセン病療養所として開所した。1956年には471名だった入所者が現在は62名、最高齢105歳、最年少66歳、平均年齢は84・1歳である。駿河の将来構想は具体的には進んでいないのが実情だ。目下の課題を自治会の小嶋美佐雄会長にズバリ聞いた。「将来構想の見通しはつかない。しかし課題としてハッキリしているのは、将来の事ではなくて、今現在の医療看護を絶対に守ること。入所者の希望を残し時間がある内に可能な限り実現させた。こうキツパリと話される言外に、入所者の切実な願いと自治会長としての覚悟を感じた。

駿河療養所では2015年秋から一般患者の入院・保険診療が始まり、地域の紹介患者も受け入れている。

医師、診療科目の不足は外部医療機関との提携等で補っている。一方で、入所者はハンセン病の後遺症に加え高齢化が進んでいるため、介護や看護に人手が必要となり、結果として、生活・福祉面の支援体制が手薄となっている。

職員からある入所者の言葉を聞いた。「故郷の味を一口でいいから、店に入れなくていいから、食べてから死にたい」。入所者の希望を叶えたいと、家族代わりになって職員達は苦慮するが、駿河には力になるボランティア組織がない。会長の「可能な限り実現させたい」という思いは、将来の構想よりも重い悲願だ。療養所は医療、看護と高齢者の施設であると同時に、強制隔離で苦難を余儀なくされた入所者達の、人生の最期を送る生活の現場でもあるのだ。「今やりたいことを実現させる。大人しく終末を迎えるようなことはしたくない」――駿河はそんな「今」を迎えている。

私達は療養所がどんな今を迎えているか、明確に意識すべきだ。今こそ傍観はやめ、何ができるか考えよう。今度こそ決して諦めさせてはいけな、と誓いたい。

「ハンセン懇」第3連絡会委員 旭野康裕

大島青松園

今、大島青松園では「社会交流会館」を建設中です。新センターに引越し、空き家になった2センターの一部をリフォームしています。個室8部屋の宿泊スペース、カフェスペース、会議ができる多目的スペース、そして、図書などの展示スペースが2016年秋に完成予定です。大島会館のすぐ隣にあるため、イベントの際にも活用できるのではと期待しています。

また、大島会館のホールでの飲食が解禁になりました。これによって2017年4月の瀬戸内三園合同花見が、大島で開催できる見込みとなりました。これまで、高松で行ってきましたが、体の不自由な方が多くなった今、島内で開催できることは本当に嬉しいことです。2016年9月7日現在、63名の方が生活しておられますが、なるべく多くの入所者の方が参加していただける花見にしたいと思っています。

花見に続いて、2017年5月には、ハンセン病市民学会が大島でも開催されます。ぜひ大島の将来を一緒に考えていたいただきたいと思います。

どの療養所も現状は同じだと思います。



大島会館(手前)と建設が進む社会交流会館(奥)

すが、最近では突然の計報をお聞きすることが多くなりました。また、お元気であった方も高松へ出かける時は、車いすで介護員さんと一緒にいう姿を見ることが多くなりました。将来のことが本当に心配になります。

ほとんどの入所者の方が、第2の故郷として大島で過ごしたいと希望されていることを一番に考え、将来、大島を決して無人島にしない施策を早急に考えるべきだと思います。例えば、人権学習の場として、対岸の屋島にある県立屋島少年自然の家を国と県が協力して作る。また、国と民間との第3セクターでリハビリセンターを作る。素人考えですが、国の人的・物的資産を有効活用することができないかという思いです。そのために国・県・市にどのような働きかけをすればよいかを考えています。

「ハンセン懇」第4連絡会委員 岡 学

菊池恵楓園

2016年4月14日夜と16日未明の2度にわたり、震度7を超える地震が熊本を襲った。菊池恵楓園も大きく揺れ、納骨堂の骨壺が棚から落ちて割れたり、初代園長の石碑が倒壊したり、監禁室等の古い建物の屋根瓦が一部落ちるなどの被害が出た。幸い入所者の方が怪我をしたり、住まいが壊れたりする被害は無かった。

特に納骨堂での、床に落ちた遺骨を骨壺に納めなおす作業は、思いのほか時間を要し、お盆直前の8月12日によって完了し、入所者の方や園の職員によって法要が執り行われたそう。私は、9月14日に勤まった久留米教区主催の秋季彼岸会でおまいりすることができた。納骨堂に入ると、骨壺が棚から滑り落ちないように布製の箱に覆われて整然と収められていた。療養所で過ごしたお一人おひとりの遺骨が大切に納骨されているのを見て、入所者の方たちの納骨堂への思いの大きさと、またその思いを受け止めて、丁寧に収骨作業をした職員に対して頭が下がる思いだった。

以前、自治会の志村康会長が、「悲惨な歴史を繰り返さぬために遺骨や納骨堂を永遠に守り抜くという使命がある。大谷派の人たちも是非、この納骨堂が忘れ去られないようにおまいりし続けてもらいたい」と話された言葉が思い起こされる。恵楓園も空き家が取

り壊され、荒地のようになっている場所が目立つようになってきた。納骨堂にお参りし、療養所で生きた人の歴史をた



地震から半年。静かなたたずまいを見せる納骨堂

ずねて、そこで人に出会い続けていくことが私にできることだと思う。

ハンセン病回復者の家族による「らい予防法」違憲国家賠償請求訴訟が熊本地裁で起こされ、2016年10月14日に第1回公判が開かれた。家族の方たちが、受けてきた差別に対して勇気を持って立ち上がられたことは、とても大きなことである。「らい予防法」廃止後も消えない差別によって、故郷や家族とのつながりを諦めざるをえなかった入所者の方達にとっても、つながりを回復するための大きな一歩になるに違いない。

「ハンセン懇」第5連絡会委員 田中一成

星塚敬愛園

私の住む寺の境内に高さ5メートルを超える「やまもみじ」の木がある。星塚敬愛園在住の上野政行さん宅の庭にあったものを移植したものだ。

上野さんのお付き合いは20年に近い。お付き合いが始まった頃、ご門徒・有縁の方たちに「上野さんの人生」を語っていただいた。後日その時のことを「私の社会復帰の始めであった」と語られていた。数年後、上野さんは、

ハンセン病を共に生きた最愛の伴侶、則子さんを浄土に送った。敬愛園にある真宗寺院の星塚寺同愛会の御同行であった。「ここ（療養所内の上野邸）が則子との終の棲家やっでねえ」と、やさしく則子さんに語りかけていたのを、私はたびたび聞いた。

療養所では、結婚に際し多くの男性が断種を強要され、女性は妊娠が発覚すると強制堕胎させられた。「黒髪の可愛らしい赤子だった」という証言もある。ある人は、生まれることのなかったわが子の代わりに可愛らしい人形を求め、ある人は幼子の衣類を求めた。

上野さん夫妻は「樹木」にわが子の成長を託した。

則子さんの死後、上野さんは終



上野さんご夫妻が育てたやまもみじ

野さんは終

の棲家と誓った家とその庭を離れ「管理棟」に居住することになった。40年慣れ親しんだ上野邸が解体、整地されるのに10日もかからなかった。引越越し前、「寺本さん、樹を貰ってくれんな」と言われ、「やまもみじ」は寺に来ることになった。「やまもみじ」もまた「ふるさと」を追われ、遠く離れた寺の境内で、第二の人生を生きている。「やまもみじ」が語りかけてくる歴史も、「らい予防法」強制隔離政策の象徴なのである。

上野さんは、1989年の「らい予防法違憲国賠訴訟」提訴の折、「人生被害」の過酷さと、「らい予防法」の過ち、そして、そのただ中を「人間の誇り」を失わず生きた証を短歌で表現し、国と社会とそこに生きる私たちを告発した。上野さんの歌を紹介したい。

田草取るさなかを吾は強ひられて此の療園に収容されき

18歳だった上野さんは今年5月に93歳を迎えた。短歌とその余白を通して、上野さんの93年の「人生」を想像することは可能か、私たちに問われている。

鹿児島教区 寺本是精

2016年4月、上野さんは歌集『川の瀬の音』を発売。ぜひ、ご一読ください。

上下巻セット2500円＋送料350円。問い合わせ●ヒューマンライツふくおか 0800-27999-00082

家族は帰りを待っているよ！

——家族提訴にふみきつた思い——

ハンセン病家族訴訟原告団副団長 黄 光男

国のハンセン病隔離政策……。患者だけでなく家族も深刻な被害を受けてきました。その家族らが国に謝罪と損害賠償を求めた集団訴訟の初公判が、10月14日に熊本地裁で開かれ、41の傍聴席を求めて200名を超える人が列を作りました。声を上げることができない家族も多い中、訴訟の前面に立ち闘っていくことを決意した原告団副団長の黄光男さんに、生い立ち、ご家族への思い、提訴に踏み切った動機などを、執筆いただきました。（編集）



熊本地裁に向かう原告団と弁護団。前列中央が黄光男さん、その隣に原告団長の林力さん（2016年2月15日）

◆家族原告568名が提訴

「ハンセン病家族訴訟」は一次提訴で59名、二次提訴では509名の原告が提訴した。この時期に提訴に踏み切ったのは、「らい予防法」が廃止された1996年から2016年3月末をもって除斥期間の20年が過ぎ、裁判に訴える効力がなくなるからだ。しかし、20年が過ぎたからといって被害は帳消しにならない。2001年の国賠訴訟熊本地裁判決では、療養所に入所した元患者たちに対する被害が認められたのであった。今回の裁判の意義は、家族の被害をあきらかにすることだ。

◆入所勸奨を受けた母

私の家族6人は大阪府吹田市で貧乏ながら仲睦まじく暮らしていた。私が生まれた頃、母はハンセン病と診断され、大阪府の職員に執拗に入所勸奨を受けていた。しかし、母は、二人の姉と兄（その後死亡）と私の4人の子どもの育児を理由に入所を拒否していた。昨年、大阪府への情報公開請求により当時の患者台帳を入手することができた。台帳によ

ると「昭和31年1月9日 強硬に勸奨せるも子供の

ことを言い立て聞き入れず」と母は入所を拒んでいた。しかし突然入所を承諾したのだ。何があったのかその台帳には記載されていないが、両親が近所の銭湯に入浴を拒否される事件があったという。これで入所を決意し、母と下の姉は長島愛生園へ入所した。父と上の姉は吹田市に残ったが、私は岡山市内の育児院へ預けられることになった。その時母は「光男は離さん！」と言って狂うように泣き叫んだという。翌年には父と上の姉もハンセン病と診断され愛生園へ入所した。そんな家族のことを何も知らずに、私は育児院でのびのびと育ったのである。

◆突然あらわれた家族

私が9歳の時、家族は社会復帰し、家族5人で尼崎で暮らすことになった。私にとっては、初めて会った両親と姉たちだった。母はいつも薬を飲んでいたの、ある日母親と二人きりになった時、私は母に「何の病気？」と聞いたのである。すると母は声をひそめて「らい病」と言った。これが私とハン

セン病の出会いだった。なぜ声をひそめるのか。これを敏感に感じた9歳の少年は、「この病気は誰にも言ってはいけない」と心に固く決めてしまったのだ。高校卒業後尼崎市役所で働きたいた以降もこの姿勢は変わらなかった。

◆妻の追及

1982年、同じ在日同胞と結婚したが、彼女にも母の病気のことが言えなかった。結婚3年目の夜、妻が突然私を追及した。母が妻に「長生きしてもしゃあない」「生きててもしゃあない」と愚痴を言うので、その理由を聞いただしてきたのだ。ハンセン病のことを全部話すと、妻は突然の話でびっくりしたものの、それで母の気持ち理解できたという。妻の嬉しい反応だった。

◆家族裁判の意味

家族裁判の原告になるきっかけは、ハンセン病遺族・家族の会「れんげ草の会」である。熊本での交流会に参加することで大勢の家族が同じ思いで苦しんでいることがわかった。今回の家族裁判では、そんな家族の被害の全容を明らかにしたい。隔離政策の被害の責任は実は市民一人ひとりにもある。自治体の職員や市民が一体となった「無らい県運動」により患者と家族を社会から追いやった。熊本地裁判決では国は謝罪したが、市民一人ひとりの加害責任を問うのがこの裁判の意義である。そして、この裁判を通して家族と元患者の断絶した関係が回復され、堂々と故郷を訪れることができるようにしたい。そして、遺骨がふるさとに帰られるようになることがこの裁判のもう一つの意義である。この裁判に是非勝って国の謝罪の言葉を聞き、「もう故郷に帰って来たいんだよ。家族はあなたが帰るのを待っているよ」と宣言したい。



世のいのりにこころいれて

(親鸞聖人の言葉『御消息集』真宗聖典 568 頁)



世に満ちている「人間でありたい」「本当に生きたい」という人々のいのりを、ちゃんと聞きながら…

陶芸がつなぐ交流

松丘保養園の木村龍一さんが、8月2日、夫婦で邑久光明園の納涼祭に参加し、光明園入所者の方と陶芸をご縁とした交流をされました。4月の全国交流集会で交流の時間を持つことを楽しみにしながらも、急なけがで断念せざるを得なかった木村さん。念願だった、療養所を超えた交流がいよいよ始まります。

💡 どうして光明園・愛生園に訪問されたのですか。

私自身陶芸をしていますし、光明園の納涼祭には陶芸の即売会があると聞き、見てみたいと思い、陶芸を通じて交流できればと考えて行ってきました。

💡 訪問はいかがだったでしょうか。

ただ物を作るだけでなく、外の人との交流を大事にしていることが感じられました。治療の一環・機能訓練として陶芸をされていることもわかりました。ただ、今回は園の外に宿をとっていたので時間の関係でゆっくり交流が出来なかったのが残念でした。



自室でくつろぐ
木村龍一さん

💡 園の方とはどんな交流をされたのですか。

即売会の準備などを手伝いました。やはり忙しそうでしたが、みなさん和気あいあいと作っておられるのがわかりました。ただ、具体的にこれからの交流のことを話すところまではいきませんでした。

💡 交流をして感じたことはありますか。

実は一緒になにか作品を作りたいと思っています。ただ、あと10年早かったらなぁということもお話の中でありました。機会があればそのような交流が出来ればと思っています。



木村さん手作りのコップ。
持ち手が大きく使いやすい

💡 交流はこれからですね。

今回はいいきっかけが出来ました。直接行って直接話ができたのがよかったです。行ってよかったというのが本音です。愛生園では大谷派の方がされている保養で、陶芸の時間があると聞きました。自分もそこで何か手伝えればと思いました。

💡 最後に一言お願いします。

陶芸をきっかけにして私自身交流の場に出るようになりました。松丘保養園にも以前陶芸クラブがありました。邑久光明園の即売会のように、参考に出来るところは参考にして外との交流ももっと出来ると思いました。

木村さんの「直接行って直接話が出来た」という言葉から、高齢化によって直接の交流が限られてきていることが感じられました。しかし、木村さんの陶芸を通じての交流は始まったばかりです。これからも交流が続いていくようお手伝い出来ればと思っています。

聞き手 「ハンセン懇」広報部会
本間義敦





私の一枚



1歳4か月の志村康さん（右）

菊池恵楓園入所者自治会会長

志村康

今号から、思い出の写真とともにご自身の歩みを振り返っていただく「私の一枚」を連載します。第1回目は、菊池恵楓園入所者自治会会長の志村康さんに、ふるさとの風景をとおして、幼い頃の思い出やご両親への思いなどを綴っていただきました。

私は1933年1月23日、佐賀県の生まれです。

この写真には、昭和9年5月17日、2歳と記載されておりますが、現代風に言えば1歳4か月ということになります。したがって私の記憶には何も残ってはおられません。撮影してくれたのは父の姉婿だったと、今も健在の母親が教えてくれました。

姉婿は旧国鉄の職員であり趣味で写真を撮っていたようです。父の姉婿の勧めがあつて私の父も鉄道員となり、私は長男として生まれました。

佐賀県や福岡県の方は、旧国鉄

佐賀線廃止後の今も筑後川河口に残る昇開橋をご覧いただいていると思います。私が2歳の時に父が昇開橋運転所に勤務しております。当時は列車が通過後に帆船が通過するときは線路ごと上昇させておりました。

私が2歳半の時に父親が私を抱いて、上昇する線路に連れて行ってくれたのですが、怖くて泣いた記憶が残っております。

当時、父はしがない鉄道員で玩具などもなく、借家は若津港（福岡県大川市）近く田んぼの中の一軒家で遊ぶ相手もなく、母が赤い爪の力ニを糸でくくって玩具代わり

にくれたのですが、カニに挟まれて大泣きしたことを覚えております。

私の記憶の始まりは赤い爪の力ニと、昇開橋の線路が昇ったときの恐怖と、写真でかぶっているお気に入りの帽子が強風に飛ばされ海水に落ちた、この3つが重なって記憶されているのかもしれない。

2歳半の記憶の後は6歳まで消えています。父は転勤があり母親の里に小学2年までいました。その後は市町村合併で唐津市浜玉町に地名が変更されていますが、当時の浜崎小学校で2年間を過ごしました。私が浜崎小学校出身ということで、地元の浜玉中学2年生は人権学習の一環として、毎年恵楓園と熊本県水俣市で学習を行っています。

官舎ができる間は借家住まいでした。炊事のためのガスなどはなく、虹ノ松原（唐津湾沿岸に広がる松原）へ、松かさ、拾いに行けば、すぐに籠いっばいになりました。

父が亡くなって30年。母は102歳で長崎の妹夫婦と暮らしており、親より先に死んでならないという願いに込められるであろうか。

あとがき

先日、国立ハンセン病資料館に行きました。そこで驚いたのです。「救らいの父」と呼ばれ、国の隔離政策を押し進めた光田健輔氏は多くの患者さんに慕われたとありました。私の想像と全く違ったのです。一体、光田氏はどうな人だったのでしょうか。

「人間は、正義の名を自分にかがけたときには、どんな残酷なこともする」。

作家・司馬遼太郎氏の言葉です。ベトナム戦争の戦地を巡り、そう書かれました。私はハンセン病問題も同じだと考えます。かわいそうな人たちを救ってあげたい。その正義が、絶対隔離政策などの残酷な行為を見えなくさせ、いまだ多くの人に終わることのない苦しみを与え続けているのです。光田氏もまた、正義の名を自分にかがけたのではないのでしょうか。

これは、決して他人事ではありません。私も正義の名を自分にかがけたときには、どんな残酷なこともするのです。問題は、それに気付かないことです。現に今、誰かを深く傷つけているかもしれない皆さん。だからこそ、絶えずハンセン病問題に学んでいかなければなりません。

（「ハンセン懇」広報部会 稲葉亮道）

真宗大谷派ハンセン病問題に関する懇談会 ネットワークニュース



真宗大谷派ハンセン病問題に関する懇談会
ネットワークニュース『願いから動きへ』45号

発行日 ● 2016年11月10日

発行人 ● 木越 渉

発行 ● 真宗大谷派解放運動推進本部

〒600-8164

京都市下京区上柳町199番地

真宗教化センター しんらん交流館

TEL : 075・371・9247

FAX : 075・371・9224

E-mail :

kaiho@higashihonganji.or.jp